

一九五〇年代の網野善彦についての政治と歴史

——国際共産主義運動からの出発

内田 力

はじめに

日本中世史家の網野善彦（生没年一九二八～二〇〇四年）は、一九七〇年代ごろから新しい歴史学の潮流（「社会史」）の代表的人物として注目されるようになり、のちに「網野史学」・「網野史観」と称される独自の歴史研究のスタイルを打ち立てた人物である。これは日本の中世（鎌倉期～戦国期）を非農業民の側から捉えなおし、一九九〇年代には国民国家批判を展開した。かれの歴史観は大量の著作により広く人口に膾炙した。とくに大衆文化の実作者への影響は大きく、映画監督の宮崎駿や小説家の隆慶一郎、北方謙三の作品

にその影響がみられる。

では、網野はなぜこれほどまで個人的な歴史研究者になったのだろうか。そう考えて網野の自伝を読むと、一九五三年の夏に左翼政治運動から離脱したことが重大な転換点として語られている。共産党内が所感派（網野のことばでは「民族派」）と国際派に分裂するなか、自身は「自らの功名のために、人を病や死に追いやった『戦争犯罪人』そのもの」だったのであり、一九五三年の夏、「そうした許し難い自らの姿をはつきりと自覚した」できごとをきっかけにして、研究をやりなおすことを決意した、と網野は語る。ところが、網野自身がこのできごとの詳細を終生あかさなかつたこともあり、一九五〇年代の網野の活動を同時代の左翼政治運動の潮流とつきあ

わけて検証した研究は存在しない。

そこで本論文では、一九五〇年代の政治環境と網野の活動との関係を検討することを課題としたい。網野の体験は小熊英二が大著『民主』と『愛国』のなかで検討しているものの³⁾、その記述は、網野が参加した「国民的歴史学運動」とナショナルリズムの関係に集中している。そのため、小熊の書をもつてしても、一九五〇年代の共産党分裂と網野の体験の関係性については未検証である。本論文では、網野の死後に刊行された証言や資料も参照しながら網野の一九五〇年代を検討する。

ある年代以上の歴史研究者にとつて、左翼運動経験やマルクス主義からの影響はとくに珍しいものではないが、年代によつてその運動の性格は大きく異なる。一九五〇年代までの左翼運動の場合は、一九六〇年代以降と比べて、日本共産党との関係が色濃い。本論文では、当時の中ソ同盟が日本共産党にあたえた影響を念頭に置きつつ、つまり国際共産主義運動という文脈に気をつけつつ、一九五〇年代に網野が体験した左翼運動の特徴をあきらかにする。本論文を つうじて、一九五〇年代特有の左翼運動のありかたを描写することになるだろう。

くわえて、一九八〇年代の「網野史学」へのつながりを考えるうえで、本論文では歴史を大衆に伝えるためのメディアの問題に注目する。なぜなら、一九八〇年代の網野は歴史を人々に伝えるために、

画像資料に着目し、絵本制作のような企画にも挑戦していったからである。その原体験が一九五〇年代の左翼運動経験のなかにあったことは、後年の「網野史学」との関係を考えるうえで見逃すことができない。

本論文はつぎのように構成されている。まず、日本の敗戦直後における網野と共産党の関係について説明する。つぎに、一九五〇年以降の共産党分裂期を対象として、網野をとりまく政治的状況を分析する。そのうえで、おなじく共産党分裂期に網野が、歴史をめぐるついでいかなる活動を展開していたのかを分析する。最後に、一九五〇年代後半の文章を分析することで、左翼政治運動から離脱したあとに、網野がいかなるかたちで歴史研究を再開したのかを検討する。

一 網野善彦と日本共産党の関係

本節では、網野の大学生時代（一九四七年四月～五〇年三月）を対象に、かれの活動と日本共産党との関係を説明する。

一九二八年生まれの網野は、一九四七年に東京大学文学部国史学科に入学し、在学中から日本共産党の政治活動に参加した。先輩である色川大吉（一九四八年に東京大学を卒業）は、「先輩の網野善彦君が一年生で党員になり、「色川さん、この道しかありません」な

んで言うんだ」と証言する⁵。敗戦直後の東京大学では、多くの学生が共産党の政治活動に参加し、それが学生運動の一大勢力となっていた。網野もそのような学生のひとりであった。

その後、網野は民主主義学生同盟（民学同）という団体に結成時から参加し、副委員長兼組織部長として熱心に活動するようになった⁶。この団体は共産党の政治方針と密接に係る学生団体であった。アメリカの対日政策が「非軍事化・民主化」の方針を転換したことをうけて、一九四八年二月に共産党は党中央委員会で「民主主義の徹底・人民生活の安定と向上・民族の独立」を基本目標として民主民族戦線の結成を目指すことを決定し、社会党などの各種団体に参加を呼びかけた⁷。この流れのなかで大学生の戦線への参加を牽引すべく一九四八年一月に結成されたのが、民主主義学生同盟であった。網野によると、「当時は、青年共産同盟があったんですが、それとは別に、もうちよつと学生の独自性を生かした組織を作ろうということになったんでしょね。その中央にわたしは引つ張りだされ」た、とのことだ⁸。民学同は全国組織であり、その参加者は「あつという間に二、三万人に増えた」のだが、網野は組織部長として、「あまり地方には行かなかつたけれども、東京の学校はずいぶん歩きまわった」という⁹。

ところが、直後に日本共産党は方針を転換して、複数の青年組織を合同することにしたため、民主主義学生同盟は解散となり、民主

青年合同委員会を経て、一九四九年四月に日本民主青年団準備会という単一組織に移行した¹⁰。これにより網野は役職から外れ、卒業論文に専念する時間を得ることになる。日本共産党に関わったことで、網野個人の活動は共産党の活動方針に翻弄されたのであった。

網野の研究対象は、日本中世における若狭国の東寺領荘園・太良荘たらのしょうであった。網野が歴史を専門にするようになったきっかけは「自分でもよくわからない」と後年に述べているが¹¹、中世研究に進んだのは大学の先輩である永原慶二との交流をつうじて歴史書を読むようになり、とりわけ一九四六年六月に刊行された石母田正の『中世的世界の形成』（伊藤書店）を読んだ影響が大きかった。

ここで、磯前順一の整理に沿って、日本のマルクス主義にとって『中世的世界の形成』が占める位置を簡単に確認しておきたい。マルクス主義やそれを前提とした国際共産主義運動の特徴のひとつは、政治戦略と科学的な歴史把握を結びつけていたことである。「一九二〇年代から一九三〇年代にかけて、いわゆる「新興科学」と呼ばれたマルクス主義歴史学」は「たくさんのソ連歴史学界の翻訳書によって支えられていた」¹²。それだけでなく、『日本資本主義発達史講座』のように、コミンテルンの政治指令である「三二年テーゼ」が歴史研究を方向づけていた。ところが、「引用者注・一九三三年の」日本共産党の壊滅以降、コミンテルンとの連絡を切断された日本のマルクス主義者は国際世界から孤立することになる。

しかし、かえってその孤立傾向が、彼らをコミンテルンの指令から解き放ち、いかなる権威にも依存することなく、日本の社会に向き合う姿勢をもたらしたといえよう¹⁴⁾。その時代の代表作が戦時下に書かれた『中世的世界の形成』であった。

マルクス主義歴史学の歴史叙述は、近代と原始古代の両方向からはじまり、一九三〇年代までにそれぞれ『日本資本主義発達史講座』と『日本歴史教程』という成果を生み出していた。その結果、

「中世史の叙述が空白部として残されることになり、講座派と教程グループがそれぞれ埋めようと試みることになる¹⁵⁾」。こうして、『中世的世界の形成』が古代から中世史への移行過程をめぐる叙述のひとつとして登場し、一九五〇年代の『日本歴史講座』（河出書房、一九五一年・一九五三年）により、「階級社会の成立とその消滅という筋書きのもとに、原始・古代・中世・近世・近代といったマルクス主義的な社会構成体を貫ぬく、歴史叙述の基本的枠組みがほぼ出揃¹⁶⁾」った。つまり、網野を魅了したのはマルクス主義という普遍理論の日本史叙述への適用を完成に近づける仕事だったのである。

これにくわえて、敗戦後の日本の再建にあたって日本に残存する封建性に対して関心が集まっていた。たとえば一九四六年二月、マッカーサーが憲法改正に際してGHQ民政局に示した三原則（「マッカーサー・ノート」）のなかには、「日本の封建制度は廃止する（The feudal system of Japan will cease.）」との文があった。戦後に再

建された日本共産党も、日本社会の封建的な性格を強く批判していた。網野の研究テーマは若狭国における封建制度の確立をあつかったものであり、敗戦直後の左翼政治運動のなかで実践的なテーマでもあった。

二 国際共産主義運動の一環としての政治活動

本節では、一九五〇年からの共産党分裂期を対象に網野の政治活動を国際共産主義運動の一環として説明する。

網野善彦は東京大学文学部を卒業後、日本常民文化研究所月島分室（東京都中央区）に勤務する。この研究所は水産庁からの委託で全国各地の漁村の古文書を収集・整理・刊行する業務をおこなっていた。ただし網野の回想によると、当初は政治活動に注力していた。研究所の業務には熱心でなかったという¹⁷⁾。

いっぽう、共産党主導の労働運動は一九四八年ごろには路線対立により高揚期が終わりにむかっていた。しかし国際政治に目を転じると、むしろ状況は緊迫化していく。中国では一九四九年に中国共産党が国共内戦を制して中華人民共和国が成立し、一九五〇年六月からは朝鮮戦争が開戦した（一九五三年七月休戦）。かくして、国内では一九五〇年に中ソ同盟との関係をめぐって日本共産党内部の路線対立が表面化する。

きつかけはコミンフォルム機関誌『恒久平和と人民民主主義のために』の記事だった。一九五〇年一月六日にこの雑誌は野坂参三の理論を批判する論文を掲載して、日本共産党に路線転換を求めた。その対応をめぐって日本共産党は主流派と反主流派に分裂した。このいわゆる「五〇年分裂」は、一九五五年七月の日本共産党第六回全国協議会（六全協）で統一が図られるまでつづくこととなる。

この分裂は「所感派」と「国際派」の対立だとしばしば解説され、網野もそのような説明をするが、やや単純化のきらいがある。たしかに当初、反主流派の「国際派」はコミンフォルム批判の無条件での受け入れを主張したのに対して、主流派である党執行部は『日本情勢について』に関する所感を発表して留保をつけた。徳田球一や伊藤律を中心とする主流派（「所感派」）は中ソ同盟との連携に慎重であり、宮本顕治や志賀義雄らは国際的な権威に拠って主流派を批判したのである。ところが、この構図はすぐに覆る。「主流派が急旋回し武装路線に走り、国際路線を追求しだした後」にこの立場は逆転するからである。¹⁸ 執行部はむしろ中ソ同盟に全面的に従う方針をとり、反主流派は執行部の極端な態度変更を批判するようになる。

もともと日本共産党の権威の源泉はその国際性にあった。世界史を説明するマルクスとエンゲルスの理論を前提とした政治方針をとり、現実の国際政治ではスターリンを筆頭として社会主義国の存在

が影響力を増していた。中国の国共内戦は中国共産党の勝利に終わり、次いで朝鮮戦争が勃発した。こうしたなかで、日本共産党の執行部（主流派）が中ソ同盟の指導下に入るのとはそう不自然な帰結ではなかった。

一九五〇年八月には「北京機関」が設立され、党執行部は中国に密航して中国から国内の党員に指示を出すようになる。このような経緯から、「所感派」が民族の問題を強調したからといって、所感派に属する人物は中ソとの関係が薄いというわけではない。

網野の活動が国際的な文脈のなかにあったことは、かれの文章からも垣間見ることができる。網野のデビュー論文である「若狭における封建革命」（一九五一年一月）は、冒頭でスターリンの『マルクス主義と民族問題』を挙げて、スターリンの「民族」定義を念頭に置いて議論をはじめている。¹⁹

もう一例は網野の講師としてのデビューに関わるものである。

「鶴見地区労（鶴見地区労働組合協議会）の主権によつて開かれている労働学校」が一九五一年七月から『社会発展略史』を二カ月の計画でとり上げた²⁰とくに、網野が講師として派遣された。ここで教科書とされているのは『社会発展略史——中共幹部必読文献』

（五月書房、一九五〇年十一月）のことであり、²¹ソ連の経済学者レオンチェフの文献を中国の出版社が一九四八年八月に刊行した書の日本語訳である。「原始共産制」↓「ドレイ制度」↓「封建制度（農

奴制度」↓「資本主義」↓「共産主義」という発展段階に沿ってそれぞれの社会の特徴を学習できるようになっており、付録としてマルクス主義思想家・艾思奇^{がいしき}による「社会発展史を学ぶときにおけるいくつかの問題」が収録されている。²²⁾つまり、網野は中国で作られたマルクス主義の教科書の翻訳を片手に教壇デビューを飾ったのである。

一九五一年十月に日本共産党が第五回全国協議会（五全協）で武装闘争の方針を決定すると（「五一綱領」）、網野もその方針に沿った行動をすることとなった。この時期の日本共産党は中国共産党の中国での成功を踏まえて、農村に革命の拠点を作る計画をもっており、各地に山村工作隊を派遣していた。網野自身は実際に山村工作隊に参加することなく、工作隊の派遣に関わっていたという。のちの網野は「督戦隊みたいな役割をしていた」と表現しているが、具体的にどの山村工作隊のことを指すかはあきらかにしていない。

しかし、時期と地域、さらに網野が工作隊員の逮捕や病死に言及していることから判断して、網野が関わったのは一九五二年の小河内村（東京都三多摩地区）への山村工作隊の送り出しと考えられる。この山村工作隊には早稲田大学の学生が参加しているが、ちょうどこの時期に網野は早稲田大学のサークル歴史研究会（歴研）にリーダーとして出入りしていた。²³⁾早大細胞は党中央（所感派）による組織再建がなされたばかりで、一九五一年暮れごろには早稲田

の社会科学研究会の講師が「主流派の松本新八郎、前田良らに切替えさせられるという状況だった」。²⁴⁾松本に近かつた網野もこのときから早大歴研に関与しはじめたのであろう。小河内村のダム建設阻止のための軍事拠点づくりには、旧国際派の早大生が多く派遣され、この派遣にはあきらかに「懲罰」と「党への忠誠心の試し」の意味が込められていた。²⁵⁾小河内では一九五一年十一月ごろから山村工作隊が活動していたが、三回にわたる一斉検挙を受けて逮捕者を出すこととなる。岩崎貞夫のように小河内での食料不足がもとで体調を崩し、下山後の一九五三年十月に三十五歳で亡くなった人物もいる。当時の逮捕者のひとり土本典昭は、小河内行きを命じられたときのことを、一九五二年六月下旬のことだとしうえで、「大義名分をふりかざし小河内の重要性を説く正体不明の「学対」（共産党の学生対策部を指す）」から工作隊参加を伝えられたと回想する。²⁶⁾この人物が網野であるかはもちろん不明であるが、同種の活動を網野が早大でしていた可能性が高い。

一九五〇年代の網野の活動については、党幹部伊藤律との関係を示唆する証言も存在している。日本中世史家の今谷明は「『網野』先生から「自分は伊藤律の指令を下部へ伝達する役」を担っていたと承ったことがある」と書いている。²⁷⁾伊藤律という人物は、五〇年分裂のなかにあつてもっともその立場が状況に翻弄された党幹部である。²⁸⁾日本共産党の当時の最高指導者徳田球一の右腕ともいえる党

幹部であり、一九五一年に北京に渡航して北京機関にくわわった。しかし、徳田が病気で倒れると、野坂参三によりスパイ容疑をかけられ、一九五三年九月に伊藤律は党から除名され中国で投獄された。伊藤の除名は共産党の機関紙『アカハタ』（のちの『しんぶん赤旗』）でも報告され、監禁状態は一九八〇年までつづく。

今谷は伊藤からの指令があつた時期を「恐らく伊藤律の離日直前の頃ではあるまいかと推測」している。³² 伊藤が国内の地下指導部で中心的人物のひとりとなつた時期と一致するので妥当な推測であろう。³³

さらに犬丸義一はつぎのような証言をのこしている。³⁴

「薄紙指導」と呼ばれた、党の地下指導部からの指示書があつた。カーボン紙で限られた枚数だけ複写され、封をした秘密書類である。それを網野さんから受け取つて、民科歴史部会のグループ員に届けるというメッセンジャーボーイの役を私が一時期つとめていたので、それを受け取るために何度か月島の常民文化研究所を訪ねたものである。

「常民文化研究所を訪ねた」ということは一九五〇年四月以降のことである。この「薄紙」³⁵が伊藤から受け取つたものかは不明であるが、網野は地下潜伏した党幹部との連絡役を務めていたことがわか

る。そして、伊藤の除名が日本に伝えられた時点で、共産党内において網野の進退が窮まったことは想像に難くない。網野が左翼政治運動から離脱した一九五三年夏はちょうどこの時期であつた。

三 大衆戦略としての歴史表象の実践（合唱と紙芝居）

前節では網野をとりまく政治的な環境について説明した。本節では網野が同時期に歴史をめぐつていかなる活動をしたのかをとりあげる。

この時期、網野は一九五一年一月に「若狭における封建革命」、同年十二月に「封建革命とはなにか」と「封建社会成り立期をめぐる諸問題」を論文として発表している。ただし、これらの論文に関してはすでに山本幸司が詳細に分析している³⁶ので、本節では網野が主導した歴史を題材とした大衆運動を中心に説明する。

「五一年綱領」下で日本共産党が主導した運動には、ソ連に倣つた都市でのゼネスト・武装蜂起戦略と中国に倣つた農村ゲリラ戦略といった武装闘争路線³⁷のほかに、平和的な大衆戦略も存在していた。武装闘争路線は徐々に失敗があきらかとなり、一九五二年七月に徳田球一の論文「日本共産党三〇周年にさいして」³⁸が発表されたことにより六全協に先立って修正されている。代わつて強化されるようになったのが大衆戦略であつた。著名なうたごえ運動やサークル運

動も一九五二年以降に活況を呈した大衆運動であった。

この大衆戦略が歴史研究の大衆化運動と結びついたのが「国民的歴史学運動（国民のための歴史学運動）」であった。この運動では、「国民のための歴史学」を目指して、民主主義科学者協会歴史部会や歴史学研究会などの歴史学会が、歴史学の実践運動を展開した。とりわけ紙芝居や演劇などの大衆性のあるメディアを通じて、歴史研究者が人々の歴史認識に関わることが企図された。⁴³⁾

こうしたなかで、歴史学研究会の委員になった網野が大会運営に携わることになったとき、かつて民学同で組織部長を務めた経験をもとに、歴史を題材とした大衆運動を推進した。⁴⁴⁾ 網野が委員として企画・運営に携わった歴史学研究会の一九五二年の年次大会（一九五二年五月）では、紙芝居「山城物語」「祇園祭」⁴⁵⁾、人形劇「あのみさま」、民話劇「彦一ばなし」の上演にくわえて、網野自身も参加した歴史家コーラス団による合唱がプログラムに組み込まれていた。ここに合唱が登場するのは唐突に感じるかもしれないが、当時のうたごえ運動の盛況を踏まえた着想だったはずである。

この歴史学研究会の大会が契機となり、歴史に関する紙芝居が研究者によってつぎつぎと制作されるようになった。この時代、大衆文化を支えるメディアは紙芝居と幻灯となっていた。これらのメディアはテレビ放送が開始されると次第に衰退にむかつていくもの⁴⁶⁾、手作りが可能であったことから、左翼運動では一九五〇年代を

つうじて重要なメディアでありつづける。⁴⁷⁾ そのようなメディア環境のなかで、ひとつの論点に浮上していたのは、学術成果の発表媒体として主流であった白黒印刷の雑誌でなく、紙芝居や幻灯というメディアで歴史を表象することであった。

網野も、歴史学研究会の封建部会での紙芝居づくりに参加した。制作に参加した福田榮次郎はつぎのように述懐する。⁴⁸⁾

大会（一九五二年の歴史学研究会の大会）後の六月二十一日の部会では、池永二郎氏の問題提起で紙芝居作成が討論されている。素材として備中国新見荘がとりあげられ、十名前後の若い連中によって作業がはじめられた。秋頃には台本も出来上り、新進気鋭の画家箕田源二郎氏にお願ひし、無償で四、五十枚の絵をかいていただくことになった。（中略）台本の草稿は福田が書き、全員で討論して作成していった。年がかわる頃には出来上り、三月頃にはいろいろなところで演じている。

当時の紙芝居制作について後年の網野は、「学問そのものの底が浅かったんですね。嘘を書いて無理をしたという感じがあった」と否定的に振り返っている。⁴⁹⁾ しかし、このシリーズは歴史研究者を監修に迎えた歴史紙芝居の先鞭をつけたという意義をもち、その後、歴史紙芝居の制作自体は学校教育用のものとして定着することとなる。⁵⁰⁾

網野個人にとつても、このときに直面した、歴史をいかに大衆に伝えるかという問題は、一九八〇年代に網野が司修とともに歴史絵本『河原にできた中世の町——へんれきする人びとの集まるどころ』（一九八八年八月）を制作するとき、ふたたび浮上することとなる。

さて、網野は一九五三年の夏に政治運動から離れ、五四年度委員の任期切れとともに歴史学研究会での活動も控えるようになる。網野はこの詳細をあかさなかつたが、後年につきのように回想している。⁴⁸

若いころ、わけもわかつていない概念を駆使して、適当な理屈を組み立てて人を説得したり、論争したりすることに喜びを見いだしていた時期があつたのですが、そういう自分が徹底的にいやになつた時期がありました。（中略）それでも一度言つたことはなかなか撤回できないわけです。（中略）そうやっていくうちに、間違いや傷口をどんどん大きくしてしまうのです。

こうして、網野は「これまでやってきたことが全く空虚だつたと気づいて、「いい加減疲れて、あの世へ行きたいと思つたほど」の状態に陥つたという。⁴⁹くわえて、網野は山村工作隊（おそらくは小河内山村工作隊）の顛末にも責任を感じていた。「大学を卒業して、日本常民文化研究所の所員になつていたので、自分では行かないで、

若い学生たちに村へ入ることを煽動」し、その結果、「自らの功名のために、人を病や死に追いやった」のであつた。⁴⁹このことから後年の網野は自身のことを「戦争犯罪人」と表現した。⁴⁹運動が共産党の権力関係や方針変更に振り回されるなかで、主導的な立場にいた網野は言行の一貫性がとれなくなつていたようだ。このような網野の言動の背景には、前節で説明したとおり、日中ソの共産党の関係性により日本での方針が二転三転していたことがあつた。

四 南北朝封建革命説の検証（一九五〇年代後半の諸論文）

前節・前々節では、一九五〇年から一九五三年までの時期に焦点を当てて網野の活動を分析した。本節では、一九五三年夏以降の網野が挫折後の研究をどのように再開させたのかを説明する。

まず、挫折後の網野の心情がよくわかる文章を引用しておきたい。一九五六年、『歴史学研究』が二〇〇号を迎えるにあたって実施したアンケートに、網野はつぎのような短文を寄せている。⁵⁰

かつて委員をやつておりました時、歴研におかけした御迷惑を日に日に身にしみて感じております。

会の発展に少しでもお役に立つことができたらと思つてはおりますが、非力のため何も出来ないのが残念です。頑張つて学

問にはげもうと思つています。今は日本の中世、荘園の勉強をあらためてやりなおして、荘園に生きる人々の姿を本当にとらえたいと思つております。

勝手なこのみ書きつらねました。

「御迷惑」とは、歴史学研究会の委員としての自身の活動を指すのだろうか（前節参照）。ここで、「会の発展」に寄与する活動から離れて中世荘園の勉強をやりなおすと述べている。では勉強の「やりなおし」はどのような経過をたどつたのだろうか。網野の文章から読みとつてみたい。

網野の研究活動はあたえられた役割を果たすことから再出発した。一九五五年三月の「文永・弘安の役」⁽⁵²⁾は東京大学史料編纂所の佐藤進一（のちに名古屋大学で網野の同僚となる）から指名を受けて取り組んだ史料解題であった。一九五六年の「霞ヶ浦四十八津と御留川」⁽⁵³⁾と「愛媛県温泉郡二神島」（河岡武春との共著）⁽⁵⁴⁾は、大学卒業後に網野が勤務していた日本常民文化研究所での業務から発展させた論文である。とりわけ前者は、江戸時代の自治的漁場管理組織である霞ヶ浦四十八津をあつかつており、一九五二年十一月の史学会大会発表「霞ヶ浦・北浦の村々の連合組織」と研究とほぼおなじテーマである。⁽⁵⁵⁾ 網野によると、「史学会の大会で行つた霞ヶ浦についての全く実証性のない報告を根底から考え直すために、常民文化研究

表1 1955年から1960年までに発表された網野の文章

1955年3月	「文永・弘安の役」
1956年2月	「霞ヶ浦四十八津と御留川」
1956年4月	「愛媛県温泉郡二神島」（河岡武春と共著）
1956年10月	「アンケート：歴史学研究200号によせて」
1957年1月	「蒙古襲来す一元寇の一断面」
1958年1月	「大和平野殿庄の所謂「強剛名主」について」
1958年4月	「鎌倉時代の太良庄をめぐる」
1959年4月	「西国における二つの東寺領荘園について」
1959年7月	「元寇前後の社会情勢について」
1959年10月	「若狭国太良庄における惣百姓について」
1959年12月	「霞ヶ浦の魚介」

※1960年は発表なし

出典：『網野善彦著作集』別巻の「著作目録」をもとに作成

所の仕事の中で一通一通の文書を丹念に読んでみた結果を、霞ヶ浦四十八津に関するノートとしてまとめ⁽⁵⁶⁾た文章であった。網野が描き出すのは、「四十八津の動きの中に、過去の大きな力の断片のようなものを感じられた」が、享保期を境に「伝統的な力を失い、生命を失つた官僚的な性格を強くしていく」という様子であった。⁽⁵⁷⁾ このような、自治権力の弱化・官僚化というモチーフは後年の代表作『無縁・公界・楽』（一九七八年）につながるものである。

一九五七年には商業誌に「蒙古襲来す——元寇の一断面」⁽⁵⁸⁾を発表

する。これは一九五五年に「文永・弘安の役」を執筆した経験を踏まえて書かれたもので、御家人竹崎季長を主人公にした読物である。これもおそらく依頼を受けて執筆した文章であろう。共著者のなかに松本新八郎がふくまれているのでその伝手かもしれない。いずれにしても網野の活動にはいつの時期も、主人公のいる物語として歴史を語るといふ課題がついてまわる。この文章では歴史の大きな流れに関する記述が最小限に抑えられているもの、一九六〇年代以降、網野の研究が新たな理論的枠組みを提起するようになると、それを人物中心の物語的な叙述といかに両立させるかが問題になっていく。網野は歴史紙芝居で悔いを残していたが、歴史を一般読者に向けて語るといふ面でも再出発をしていた。

個別の荘園史の論文をふたたび発表したのは一九五八年からである。網野はもともと若狭国太良荘という東寺領荘園を研究対象としていたが、それまでの中世に関する知識を再確認するために、おなじ時代の複数の東寺領荘園を検討し、その勉強の成果を発表するようになった。『歴史学研究』に掲載された研究ノート「大和国平野殿庄の所謂「強剛名主」について」⁽⁵⁹⁾は、一九五四年のはじめから国学院大学のメンバーを中心にした史料を読む研究会に参加したことがきっかけとなった研究であった。⁽⁶⁰⁾この研究会に誘った池永二郎は歴史学研究会で網野とともに紙芝居を制作したメンバーのひとりである。

この研究ノートはつぎのようにはじめられている。「南北朝の内乱の政治的意義を評価する場合、それに近づく^ア道はいくつかあると思われるが、一つの視点として、この内乱ではじめて大きくあらわれてきた動きを、その出発点にさかのぼって考えてみる見方がありうると思う」⁽⁶¹⁾。ここからわかるのは、網野は「南北朝の内乱の政治的意義」の評価が問題関心でありながら、「元寇前」の荘園を分析しはじめたということである。この段階では、南北朝の「内乱を一つの「革命」と評価する人達」が存在すると紹介される程度で、具体的な論者名やそれへの賛否は明記されていない。網野は、かつて「若狭における封建革命」（一九五一年一月）・「封建革命とはなにか」（一九五一年二月）を書いたことからわかるように、南北朝の内乱を「封建革命」とする立場にあつたが、運動からの離脱にともなつてその見解を実証的に検証しようとしていた。その背景にあるのは、「五〇年分裂」下に網野に対して指導的な立場にあつた松本新八郎の南北朝封建革命説であつた。⁽⁶²⁾とはいえ、もしそのような網野の経歴を知らなければ当時の読者は研究の意図が読みとれなかつたであろう。

この四頁の短い研究ノートで網野は「南北朝の内乱」の評価に関して一応の見通しを立てている。「南北朝の内乱」は「それぞれの人々の私的な利害が、幕府の滅亡によつてそのまま表面にあらわれ、はげしく衝突」したものであり、その「本格的な解決は、はるか後

までもちこざれているように思われる」と指摘する。⁽⁶⁵⁾つまり、「南北朝の内乱」自体は歴史に新しい事態をもたらす革命ではないとされる。しかしそのいっぽうで、現地で荘園の支配を担った下司の横暴に対する百姓たちの「素直な恐怖と、それに抵抗しようとする決意」こそが「混迷を克服する一つの力」となったのではないかと、とす。⁽⁶⁶⁾すなわち、この時点において網野は、私的な利害の衝突とは性質の異なるものを百姓たちの動きのなかに見出し、それが内乱を克服・解決する力になると論じたのである。ここで網野が自らに問いかけているのは、なぜ南北朝の内乱が革命にみえてしまったのか、そして、真の革命が拠って立つものはどこに見出されるべきなのか、という二つの問いである。

その後も元寇前後の荘園を分析した論文がつづく。一九五八年四月、『史学雑誌』に研究ノートとして掲載された「鎌倉時代の太良庄をめぐって」⁽⁶⁷⁾は、すでに太良荘に関する論文を一九五一年一月に「若狭における封建革命」（『歴史評論』二七号）として発表していた⁽⁶⁸⁾ので、論文冒頭でわざわざ、「なお蛇足であるが、この論旨は以前『歴史評論』誌上に発表した私の愚論とは全く無関係なものであることをおことわりしておきたい」と記す。⁽⁶⁹⁾一九五九年四月の「西国における二つの東寺領荘園について」⁽⁷⁰⁾は、伊予国弓削島荘・安芸国後三条院新勅旨田という東寺領荘園を対象にしている。弓削島荘は「塩の荘園」と呼ばれ、日本常民文化研究所での業務から一九六〇

年代以降に網野が中世塩業を研究する発端となった論文である。このように、研究所の業務を機として個人的な荘園に着目することで、自身の中世史論の根拠をたしかなものにしようとする傾向がすでにみられる。このような姿勢が、生業のなかでも農業に視野を限定しない研究スタイルにつながっていく。

これらの三作品は「南北朝の内乱」という大きな論点を意識しているものの、あつかうのは個別の荘園であったことから、卑屈ともいえる自己限定の表現が随所に用いられている。たとえばつぎのような文である。「もとよりこの一つの荘園の実例のみをもって、大きな問題についてあれこれいうことはさしひかえねばならぬことであるうし、いままでのべられたことにやや具体的な一例を加えるにすぎない（後略）」⁽⁷¹⁾。さらに、論文の導入部分において、「若干の補足を加えうる余地があると思われた」や「蛇足を加えるにすぎない結果になることをおそれる」といった表現も登場する。⁽⁷²⁾

しかし、一九五九年に発表されたふたつの文章、「元寇前後の社会情勢について」（『歴史学研究』二二二号）と「若狭国太良庄における惣百姓について」（『史学雑誌』六八巻一〇号）⁽⁷³⁾では、自身の個別荘園研究を総括する段階に入ったことで、自身の研究の意図をより明確に記しはじめている。まず、「元寇前後の社会情勢について」は、「最近（こころみ）た2、3の荘園の勉強のなかで感じたいくつかの点を整理」し、「社会の根底をゆるがすほどの動き」のなかに農村での

動きと政治の動向を位置づけようとする試論的な論文である。³³この作品でこれまでの自身の鎌倉期に関する研究を総括したうえで、つぎの「若狭国太良庄における惣百姓について」でついに南北朝内乱の評価に歩みを進める。ようやく「五〇年分裂」下での歴史研究の議論に直接言及できるようになったといえる。

網野が念頭に置くのは石母田正と松本新八郎の「悪党」観の対立であった。そのことが「若狭国太良庄における惣百姓について」ではじめて明記される。³⁴畿内の中小武士である「悪党」に関して、石母田はその存在の「頹廢性」を指摘するが、網野はむしろそのエネルギーが室町期をつうじて社会を支配したといい、その意味で松本が「この時期の惣および党・一揆の「革命性」を見出したのに一定の理解を示す。しかしつづけて、つぎのようなもってまわった表現で松本の見解に留保をつけている。「もとよりその根底に真に革命的という動きがなかったというのではないが、石母田氏の指摘されているように、それを支配している動きは社会の被抑圧者たちの声を真に代弁しうるものであったとは思われない」。³⁵網野は生産力発展にもとづく新たな社会的動きの代表としては悪党と惣百姓を挙げているが、この文が暗示するように、それらの評価は両義的なものであった。悪党同様に、太良庄の惣百姓には、「利用できるかぎり東寺を使用しようとする凶太い強さ」があつたものの、それは真の革命を導くような「すべてをすて去つたもののもつ強さとは

およそ無縁のものであり、それゆえに南北朝期を経てもなお東寺の支配を許す「弱さ」になつていた、と分析する。³⁶東寺に対する惣百姓の要求は一見強硬だが、そこに「自らに対する抑圧が他のものにも同様であることをのぞむ気持が働いていることをみのがすわけにはいかない」と論じ、惣百姓が東寺の支配を拒絶して「真に自らの足で立とうとする動き」は不十分であつたと断じる。³⁷

ここにおいて、左翼政治運動から離脱したあとの網野は、国際共産主義運動の影響を受けた時期の歴史解釈から出発して、新たな解釈を打ち出そうとしていた。このときの網野はすでに、マルクス主義でいう「革命」を漸進的な社会的な「動き」であると読み替えている。「南北朝の内乱」のような歴史上の大事件にあてはめようとはしていない。そのうえで、網野は「真に革命的」といふ動き「の有無を論じる。いわば真の革命と偽の革命を弁別しようとしているのである。その規準には倫理性が込められていた。「社会の被抑圧者たち」の側に立ち、力関係のなかでうまく立ち回るのでなく抑圧それ自体を拒絶するどうか。網野が語る先には左翼政治運動のなかで「革命」を論じていたかつての自分自身がいたはずである。上記の分析が一九六〇年代・七〇年代をつうじて、事例を増やしながら理論的に深化していくことになる。

おわりに

本論文では、国際共産主義運動との関係を確認しながら、網野の歴史研究の出発点として一九五〇年代までの網野の活動を検証した。戦後最初期に高揚した左翼政治運動は共産党が主導したことから、網野をはじめとして東京大学の学生が大量に共産党に入党した。しかし一九五〇年代に入ってから、共産党が国際共産主義運動の一部に組み込まれて混乱することで、その高揚期が終焉する。網野の左翼政治運動はこのような時代状況に特徴づけられている。網野は大学生時代から政治運動に深く関与しており、そのために政治運動の体験が歴史研究を大きく左右させていた。とはいえ、この点は他の同世代の歴史研究者と共通する特徴である。

とすると、網野史学の原点として、他の歴史研究者との違いを生み出した要因は何だったのか。なぜ網野は当時の研究潮流（いわゆる「戦後歴史学」）から外れ、個性化するようになったのか。当時の政治運動から後年の「網野史学」への影響を考えるに、つぎの三点が重要であったといえよう。

ひとつは、網野の左翼政治運動が中国やソ連の動向・意向によって翻弄される性格をもっていたことである。つまり、網野は一九五〇年代前半の一時期、国際共産主義運動の一部分に組み込ま

れていたことである。その体験が、一九六〇年代・七〇年代に歴史研究者のなかでの反主流派意識と結びついていく。一九六〇年代以降の網野はときおり自身の文章のなかで外国での政治状況に言及しているが、同時代に実在する社会主義国の状況を考慮しながら、国内の政治状況を相対化しようとしていた。歴史研究においても、外国史研究や他国での歴史研究の状況に強い関心を示しつつづけていた。この点はイギリスやフランスの「新左翼」と比較する際に重要な視点となるだろう。

ふたつめとして、網野の研究が、政治的に否定された学説の検証にむかったことである。日本常民文化研究所に勤務していたことで、研究活動の継続が可能な環境にいたことはもちろん重要な要因であった。それにくわえて、一九五〇年代後半には共産党の政治的権威が低下したために、左翼運動からの離脱者でも主流の歴史解釈に對して議論ができるようになりはじめていた。一九五〇年代後半の網野の文章の変遷は、主流の歴史解釈への遠慮が解けていく過程であったとも見ることができよう。

最後に、一九五〇年代の網野が歴史を表象するメディアの問題に接していたことを指摘しておきたい。この点のちに網野の研究関心を方向づけることになる。網野は若くして歴史知識のメディアへの応用を体験することとなった。運動からの離脱後は文献史学に邁進し、視覚メディア上の歴史という論点をいったんは忌避するよ

うになる。しかし、のちに網野は不承不承の態をとりつつつたたびこの論点にとりくむことになる。そのとき、自身の歴史に対する知識の不正確さを思い出すこととなり、最終的に歴史の表象の問題に踏み込むに至る。それは、当時の左翼運動が目をつけたとおり、一九八〇年代のメディア状況を先取りするものであった。

注

- (1) 網野本人が一九五〇年代のできごとに言及した文章・インタビュー・対談は以下の書籍にまとめられている。『歴史としての戦後史学』日本エディタースクール出版部、二〇〇〇年・『歴史と出会う』洋泉社新書、二〇〇〇年・『日本』をめぐって 網野善彦対談集』講談社、二〇〇二年。そのほかには以下の文献がある。『中世東寺と東寺領荘園』東京大学出版会、一九七八年、序章・『中世史研究第三期へ』『日本読書新聞』二〇〇〇号、一九七九年四月二日(『中世再考』日本エディタースクール出版部、一九八六年所収)・『日本中世の非農業民と天皇』岩波書店、一九八四年、序章注釈部分・『断片を読む——襖の下張りのなかに歴史が見えてくる』(聞き手・大月隆寛)石井慎二編『別冊宝島一六七 学問の仕事場』JICC出版局、一九九二年。なお、網野の経歴については『網野善彦著作集』別巻(岩波書店、二〇〇九年)の「網野善彦年譜」や「著作目録」を参照のこと。
- (2) 網野「戦後の『戦争犯罪』」岩波書店編集部編『戦後を語る』岩波新書、一九九五年、一〇頁。
- (3) 小熊英二『「民主」と「愛国」——戦後日本のナショナリズムと公共性』新曜社、二〇〇二年、とくに八章。

- (4) 日本共産党による公式の党史であるつぎの文献では、一九五〇年代の分裂のことを「五〇年問題」と呼んでいる。それまでの徳田球一による専決指導が党の分裂と外国からの干渉を許したが、「五〇年問題」の総括をとおしていかなる外国勢力の干渉も許さない自主独立の立場を確立した、と位置づけられている。日本共産党中央委員会『日本共産党の八十年 一九二二〜二〇〇二』日本共産党中央委員会出版局、二〇〇三年、第四章、とくに一二七〜一二八頁。
- (5) 色川大吉「人生の贈り物五 ナロードニキに憧れ農村で教師に」『朝日新聞』二〇一五年三月二〇日夕刊、六面。なお、この記事の存在は木下龍馬氏(国立国会図書館)のご教示により知りえた。伏して感謝する。

- (6) つぎの文献に「民主主義学生同盟結成趣意書」や「民主主義学生同盟結成宣言」が掲載されている。三一書房編集部『資料戦後学生運動』一、三一書房、一九六八年、三五〇〜三五五頁。三五〇頁の「民学同通達第一号」(一九四八年九月九日付)には「民学同は民主主義擁護同盟及青年戦線・学生戦線統一の重要な一環として急速な組織を期待する」とある。三五四〜三五五頁によると、結成時の「中央委員会役員」はつぎのとおり。委員長 中森時人、副委員長 網野善彦、事務局長 大沼鉄郎、教育宣伝部長 西沢舜一、文化部長 荒川幾男、組織部長 網野善彦、機関紙部長 中村正光、財政部長 北田芳治。三五二〜三四頁の「各支部短信」にふくまれる「一カ月の活動の自己批判(組織部)」という文章は網野の執筆だった可能性がある。なお、一九六三年結成の同名団体が存在することに注意。
- (7) 一九四九年七月に統一戦線組織である「民主主義擁護同盟」が成立するに至るが、短期のうちに運動は崩壊し、同盟は一九五〇年八月に解散した。吉田健二「民主主義擁護同盟の成立と崩壊過程——戦後日本における統一戦線の原型」『社会労働研究』一九一／二、一九七三年。
- (8) 網野「断片を読む——襖の下張りのなかに歴史が見えてくる」、一二四頁。
- (9) 同右、一二四頁。

- (10) 長崎真人『命ある限り』光陽出版、二〇〇七年、一六二～一六四頁。著者の長崎は日本青年共産同盟（青共）の一員としてこの組織改編での大混乱に立ち会った。長崎によると、一九四九年一月はじめ、青共の全国グループ会議の席上で、共産党の青年対策部長だった西沢隆二（ぬやまひろし）が突如として青共解散と民学同などの合同を提案し、「とにかく俺に任せてくれ」と言い残して去ってしまった、とのことである。
- (11) 網野「断片を読む——襖の下張りのなかに歴史が見えてくる」、一二二頁。
- (12) 磯前順一「戦後歴史学の起源とその忘却」磯前順一・ハリール・D・ハルトゥーニアン編『マルクス主義という経験——一九三〇—四〇年代日本の歴史学』青木書店、二〇〇八年、序章。
- (13) 同右、二四頁。
- (14) 同右、二八～二九頁。
- (15) 同右、二七頁。
- (16) 同右、二九頁。なお、戦後のマルクス主義と日本史学の関係についてはつぎの文献を参照のこと。戸邊秀明「マルクス主義と戦後日本史学」『岩波講座日本歴史第二二巻 歴史学の現在』岩波書店、二〇一六年。
- (17) たとえば、網野『歴史としての戦後史学』日本エディタースクール出版部、二〇〇〇年、三～四頁・二八八頁。なお、当時の日本常民文化研究所月島分室での業務内容については、業務マニユアルとして作成された、つぎの文献からうかがい知ることができる。日本常民文化研究所水産庁資料整備委員会『資料筆寫のしおり』（謄写版）一九五一年五月。
- (18) 下斗米伸夫『日本冷戦史——帝国の崩壊から五五年体制へ』岩波書店、二〇一一年、一九五頁。
- (19) 網野「若狭における封建革命」『歴史評論』二七、一九五一年（『網野善彦著作集』別巻、一六頁所収）。
- (20) 石母田正『続歴史と民族の発見』東京大学出版会、一九五三年、一五一～一五五頁（『民科本部通信』四号（一九五一年九月）から網野の文章を転

載したもの、『網野善彦著作集』別巻、一九一～一九三頁）。

- (21) 解放社編集部編、小林信訳『社会発展略史——中共幹部必読文献』五月書房、一九五〇年。なお、この書はのちに統編と統々編が出版されている。解放社編集部編、尾崎庄太郎訳『続社会発展略史』五月書房、一九五三年。同『統々社会発展略史』五月書房、一九五四年。
- (22) この書に対してはつぎの書評が存在する。尾崎庄太郎「異色ある中国の啓蒙書——『社会発展略史』と『社会科学基礎教程』」『歴史評論』五一—二（通巻二八号）、一九五一年。
- (23) 網野『歴史としての戦後史学』二八七頁。
- (24) 網野「祖先の事業への尊敬を——謙虚に歴史をみる」『学園評論』創刊号、一九五二年七月。この文章は『早大歴研月報』一九五一年一月二六日号（筆者未見）からの転載であると記されている。なお、この文章は『網野善彦著作集』別巻の「著作目録」には挙げられていない。
- (25) 由井誓「パルチザン前々史」『由井誓 遺稿・回想』新制作社、一九八七年、一三三頁。
- (26) 土本典昭「『小河内山村工作隊』の記」『映画は生きものの仕事である——私論・ドキュメンタリー映画』未來社、一九七四年（初出一九七〇年三月）。
- (27) 同右、一〇〇頁。
- (28) 厳密にいうと、宣伝部隊である山村工作隊のほかに、軍事組織である「Y組織」（中核自衛隊や独立遊撃隊）も小河内で活動していたが、「Y組織」の実態は当時の黨員も知りえない部分が多かった。本論文では区別せずまとめて「山村工作隊」と呼んでいる。小河内における共産党軍事組織の活動については、たとえば由井誓（一九三二年生まれ、一九五〇年早稲田大学入学）の文章を参照のこと。由井誓「パルチザン前々史」・「内側からみた日共50年代武装闘争（回顧対談）」・『五一年綱領』と極左冒険主義のひとこま、いずれも『由井誓 遺稿・回想』（新制作社、一九八七年）所収。

- くわえてジャーナリスト川島憲治によるつぎの文献も小河内での活動の事態を詳細に調査しており参考になる。川島憲治「山村工作隊と中核自衛隊——空回りした和製バルチザンの革命への献身」『反逆者とテロリストの群像』『別冊歴史読本2』三三—三三 新人物往来社、二〇〇八年。
- (29) 土本「小河内山村工作隊」の記」一〇〇頁。
- (30) 今谷明「時局下の網野先生」『網野善彦著作集』六卷「月報」二〇〇七年一月、五頁。その後発表された犬丸義一の文章もあわせて参照のこと。今谷の文に対して補足や訂正する意図があると思われる文がいくつか見受けられる。犬丸義一（談）『網野さんと私』『網野善彦著作集』四卷「月報」一五、二〇〇九年一月、七—一〇頁。
- (31) 伊藤律についてはたとえつぎの文献を参照のこと。伊藤律『伊藤律回想録——北京幽閉二七年』文藝春秋社、一九九三年。つぎの文献は伊藤律の次男による回顧録である。伊藤淳『父・伊藤律——ある家族の「戦後」』講談社、二〇一六年。なお、網野はつぎの文献で宇野脩平とともに左翼運動に入った人物として伊藤律に言及している。網野『歴史としての戦後史学』一八三頁。
- (32) 今谷明「時局下の網野先生」『網野善彦著作集』六卷「月報」、五頁。今谷はなおし箇所です「五六年以降の武装共産党時代」と書いているが、「五年以降」の誤記と思われる。
- (33) 井上敏夫「戦後革命運動の息吹と變」『マイクロフィルム版「戦後日本共産党関係資料」解題・解説』不二出版、二〇〇八年、三七—三八頁。
- (34) 犬丸義一（談）『網野さんと私』『網野善彦著作集』四卷「月報一五」、九頁。なお、一九五〇年代の状況に関してはつぎの文献も参照のこと。犬丸義一「戦後日本マルクス主義史学史論」『長崎総合科学大学紀要』二五—一、一九八四年。
- (35) 薄い紙が用いられたのは、不意に警察官の職務質問にあつたとしても飲み込むことができるようにするためだつたという。「薄紙指導」についてはつぎの文献を参照のこと。井上敏夫「戦後革命運動の息吹と變」三七—三九頁。
- (36) 山本幸司「論文編解説」『網野善彦著作集』別巻、一七七—一九三頁。
- (37) 由井誓「内側からみた日共50年代武装闘争（回顧対談）」『由井誓 遺稿・回想』、とくに四五—四九頁。
- (38) ここで注意が必要なのは、歴史を大衆にとって身近なものにしようとする活動の必要性自体は敗戦直後から認識されていたということである。一九四九年、農村文化教育会の発行する『緑の工場』に東京大学史料編纂所所員（稲垣泰彦・杉山博・永原慶二）が「村の歴史を書こう」を連載したとき、永原慶二はつぎのように書いた。「村の民主主義の歴史を自分で学ぶことによって、自分たちの生き方を見出し、新しい民主主義の歴史を自分の行為でつくってほしいと思う」と。このように、敗戦後の日本で「新しい民主主義」を実現するには、大学に所属する研究者が歴史を研究するだけでなく、もつと多くのひとが歴史を学び、歴史を書くことが近道であると考えられていた。永原慶二「村の歴史を書こう（三） 村の歴史の書き方——富士山麓のある山村を例として」『緑の工場』一—五、一九四九年、一五頁。
- (39) なお、つぎの文献には網野の発言が記録されている。「よい話が出たが、（中略）また話しが抽象的だ」といったように非常に高圧的な物言いなのが印象的である。「平和懇談会記録 歴史学はどうあるべきか」『歴史学研究』一五五、一九五二年、五五頁（懇談会の開催は一九五一年十月二十七日）。
- (40) 紙芝居「祇園祭」はその後、東京大学出版会から書籍化された。民主主義科学者協会京都支部歴史部会『祇園祭』東京大学出版会、一九五三年。さらに、西口克己による小説化を経て、一九六八年には映画、一九七六年には絵本になった。
- (41) 幻灯からテレビへの技術的な連続性についてはつぎの文献で考察した。内田力「ある海軍技師の光学技術と戦後メディア——カメラ・幻灯・テレビ

「大塚英志編『動員のメディアミックス——〈創作する大衆〉の戦時下・戦後』思文閣出版社、二〇一七年。

(42) 当時の左翼政治運動とメディアとの関係については、つぎの文献を参照のこと。鳥羽耕史『一九五〇年代——「記録」の時代』河出書房新社、二〇一〇年。とくに戦後労働運動における幻灯メディアについては、鷲谷花による一連の研究を参照のこと。

(43) 福田榮次郎「幻の紙芝居」と「安良城旋風」——歴史学研究会編『証言戦後歴史学への道——歴史学研究会創立80周年記念』青木書店、二〇一二年、三三九〜三四一頁（初出一九八八年）。この紙芝居は「新見の人々にもみてもらおう」ということになり、杉山博氏によって新見に送られた。しかし、その後は行方不明」となったことである。

(44) 網野・司修「対談・画家の目歴史家の目」『河原にできた中世の町——へんれきする人びとの集まる場所』（岩波書店、一九八八年）所収冊子、一頁（『歴史と出会う』一六七頁所収）。

(45) 「歴史紙芝居シリーズ」全一二巻（企画編集：日本教職員組合・歴史教育者協議会・教育紙芝居研究会、出版：日本紙芝居幻灯株式会社、一九五三〜一九五六年）。

(46) 網野（インタビュ）「網野善彦の世界」『月刊百科』四二四、一九九八年、二二頁（『歴史と出会う』九九〜一〇〇頁所収）。

(47) 網野（インタビュ）「百姓イコール農民ではない——公的文書が切り落とした歴史を叙述する」『公研』三五—二、一九九七年、五〇頁（『歴史としての戦後史学』二八八頁所収）。網野は同時期に日本常民文化研究所内での論争にも直面していた。研究所の日常の仕事に追われて所員個人の勉強ができないという問題が表面化するとともに、古文書収集の成果報告書である『漁業制度資料目録』刊行計画に対して、方針が曖昧であることから拒否するかどうかで論争が起きてメンバー同士が対立していた。この論争のなかで網野は当初、刊行拒否派だったが、批判しながらも目録は刊行す

べきとの立場に転じたと回想している。なお、上述の論争の結果として中地和平が研究所を辞職した。網野は中地から研究所内で厳しい批判を受けていたと書いているが、批判の内容など詳細は不明である。網野『歴史としての戦後史学』一九八〜二〇〇頁・網野「特集人文書の戦後五〇年歴史篇」『人文会ニュース』七三、一九九五年、九頁（『歴史と出会う』、一九九頁所収）。

(48) 網野・小熊英二「人類史的転換期のなかの歴史学と日本社会（上）」『神奈川大学評論』三八、二〇〇一年、一〇頁（『日本』をめぐって』一六五頁所収）。

(49) 網野「戦後の『戦争犯罪』」岩波書店編集部編『戦後を語る』岩波新書、一九九五年、一〇頁（『歴史としての戦後史学』四頁所収）。

(50) 同右。

(51) 「歴史学研究」二〇〇号刊行によせて「歴史学研究」二〇〇、一九五六年一〇月、四九頁（引用にあたって旧漢字を新漢字に改めた）。

(52) 網野「文永・弘安の役」『世界歴史事典二二 史料篇日本』平凡社、一九五五年。

(53) 網野「霞ヶ浦四十八津と御留川（地方史研究）」『歴史学研究』一九二、一九五六年。

(54) 河岡武春・網野善彦「愛媛県温泉郡二神島」伊豆川浅吉編『共同漁業権への依存度に関する調査』（謄写版）一九五六年。

(55) 「史学会第五十一回大会記事（部会発表要旨）」『史学雑誌』六一—二、一九五二年、六五頁。

(56) 網野「戦後の『戦争犯罪』」、一一頁。

(57) 網野「霞ヶ浦四十八津と御留川」『歴史学研究』一九二、三五〜三六頁。

(58) 網野「蒙古襲来す——元寇の一断面」『特集知性』二（河出書房）、一九五七年。

(59) 網野「大和国平野殿庄の所謂「強剛名主」について」『歴史学研究』

- 二一五、一九五八年。
- (60) 「網野善彦年譜」『網野善彦著作集』別巻、二〇六頁。
- (61) 網野「大和国平野殿庄の所謂「強剛名主」について」、四六頁。
- (62) その主張は「南北朝内乱の諸前提」（一九四七年）や「中世末期の社会的変動」（一九四八年、単行本収録時の題名は「南北朝の内乱」）にまとめられている。ともにつぎの単行本に収録されている。松本新八郎『中世社会の研究』東京大学出版会、一九五六年。
- (63) 網野「大和国平野殿庄の所謂「強剛名主」について」、四九頁。
- (64) 同上、四九頁。
- (65) 網野「鎌倉時代の太良庄をめぐって」『史学雑誌』六七―四、一九五八年。
- (66) 網野「若狭における封建革命」『歴史評論』二七、一九五一年。
- (67) 網野「鎌倉時代の太良庄をめぐって」、六七頁。
- (68) 網野「西国における二つの東寺領荘園について」『日本歴史』一三〇、一九五九年。
- (69) 網野「大和国平野殿庄の所謂「強剛名主」について」、四六頁。
- (70) 網野「西国における二つの東寺領荘園について」、八〇頁。
- (71) 網野「元寇前後の社会情勢について」『歴史学研究』二三一、一九五九年。単行本『悪党と海賊』（法政大学出版局、一九九五年）収録時の題名は「元寇」前後の社会情勢について」とされている。
- (72) 網野「若狭国太良庄における惣百姓について」『史学雑誌』六八一〇、一九五九年。
- (73) 網野「元寇前後の社会情勢について」、四三頁。
- (74) 網野「若狭国太良庄における惣百姓について」、四一頁。
- (75) 同上、四一頁。
- (76) 同上、五五頁。
- (77) 同上、五五頁。